

聖地甲子園 その3

新車を1月24日に注文しました。磐城ブルーのトヨタヤリスで、そのナンバーは福島530せ5405になりました。そのころは、「福島いざ押せ甲子園ゴー」という語呂合わせです。

車が、3月7日に届きました。まだ、200キロも乗っていませんが、この車で夏の甲子園に向かいましょう。新しい戦いが始まります。19人のメンバーと、マネージャーに今後一年生が加わります。この新しいメンバーと共に、夏に向けて甲子園をもぎ取っていきましょう。扉はこじ開けていくものです。たたいているばかりでは開きません。皆で力を合わせてこじ開けていくからこそ、甲子園への道を示す神が宿ると考えます。今までも、何百人もの先輩方がこじ開けてきた扉です。一度は、この世代にも開いた扉です。必ず開いていこうではありませんか。

校長室には、甲子園の土があります。第67回選手権大会昭和60年の大会に出場したときの土です。土と行っても乾いたさらさらの砂です。この砂の手触りを時々かみしめながら、甲子園への道を願っていました。

選手達にはそれぞれのキャラクターとこだわりがあります。そのキャラクターのよいところを見つけ、その部分を強調しながら、こだわっているところに理解を示していくことが、生徒を伸ばす手立てだと考えます。監督や部長や顧問は、そのことをよく理解しています。自分たちがこのグラウンドでどのように練習したか、その結果よいところと直すべき点はどこであるかをよく話し合っています。行き着いたところは、生徒の自主性をどのように伸ばすかというところでした。

私もそのことを理解しています。ただ、その関係性をもう一つ外からそれぞれに向かって感じたことを述べてきました。私の立ち位置と、私のすべきところはそのことではないかと考えています。

暑い夏がやってくるでしょう。いろいろなマスコミとの対応を経験し、生徒達はたくましくなりました。分からないところもピースが埋まると、次の対応が変わります。これは、勉強と同じです。このことを理解する中で、飛躍が生まれまます。突然伸びるのです。

人間とは精神が支える生き物です。精神性の充実によって、毎日の生活が深まります。生きることから、どう生きるか、どのように生きるか、なぜ生きるか、よく生きることとは何かについて思いを巡らせ、効率や対費用効果ばかりではない、本質的な関わり合いや存在の意義や成長への意思や相手への思いやりが身についていくと考えます。磐城高校生の突然変容と、驚くほどの成長に期待します。